

おらほノ魂

特集 第5回

雲沢地域

仙北市の最南西に位置する雲沢地域。北西から流れる入見内川は旧西仙北町との境にある、とんけ山（鬼壁山）を囲うように南に流れていきます。上流は蛇行し、川面に自然が落ちていく川の姿があり、下流の地域はサイフォン取水口を活かした田園が広がります。



4つの地域をつなぐ川

豊かに実った田園風景に彩りを与える夕日、遠方に広がる奥羽山脈から登る月、そして、西長野、雲然、八割、下延の4つの地域を繋ぐ入見内川。
この風光明媚な環境に誇りを持ち、この自然環境を守ってきたいとの強い想いが伝わってきます。



①入見内川の上流。曲がりくねった「川」らしい姿を残したいとの願いも聞かれます



④川下田川との合流地点



②算額を収めた熊野神社



⑧奥羽山脈や月を一望。月見が楽しめる場所です



③鬼壁川上流にそびえるとんけ山（鬼壁山）



⑨地域の氏神様を集め大正時代に建立されたとされる三吉神社



⑥川向こうの田畑に通じる近道（橋）。水位が上がると渡れなくなります



⑩入見内橋付近から上流を望む

八割



⑪大正時代から地域を見守る半鐘。このような形で現存しているのは地域で守られてきたから



⑦月見堂橋付近



⑫大瀬蔵野橋から上流を望む

集中豪雨がもたらした
川への想い

この地域に暮らす人が、この川に多くの思い出を持ち、多くの恩恵を受けてきました。子どもの頃は唇が紫色になりながらも川に飛び込んだり、魚を捕まえ、車がない時代には馬も泳いでいた、そんなつかしい記憶を語ってくれます。反面、川の持つ怖さも経験しています。

近年では、平成22年7月に発生した集中豪雨で、雲沢地域は甚大な被害を受けました。良くも悪くも、川が運んだ文化や歴史、生活は、雲沢地域運営体により作成された冊子「川を語るー入見内川の川筋に暮らしてー」で後世に伝えられています。



雲然柿
この土地でしか育たないと言われる「雲然柿」は、雲然地区の約7割の家に植えられているとか。昔からおいしいと評判の柿です。柿漬けに使用され、特徴である強い渋みと塩の作用で、漬け物が「層美味しくなります」。



「地元の宝「雲然柿」で漬けた柿漬けを特産品に」
雲沢運営体高橋会長の呼びかけに集まった皆さんが「雲然柿漬物味究会」（会員は現在8人）として活動しています。
「以前は自宅の柿の木の実は全部取って、知人に分けたり、柿漬けに使ったりしたが、今は手が回らなくなって。冬になっ

地域の味で 特産品づくり

雲然柿漬物味究会

でも実がついているのを残念に思っていた」（藤原フミ子さん）
「秋に田んぼが終わって、今度は柿を収穫。売りに行ったり、柿漬けに使ったり。収穫は手間の係る作業だったが、冬を迎える前の作業として当たり前だった」（林崎清子さん）
お話を聞いたお二人は、湯ざわしをして渋を抜いて食べた思い出など、かつては暮らしの中あった特色ある地元の味覚を守りたいと、会員の方が呼びかけに参加したと言います。
活動を始めた昨年、各家庭の柿漬けを持ち寄っての試食会を開催。試食会に寄せられた様々な意見を参考にして、皆さん好みに合うような漬け物の味を研究してきました。
目指す味になるよう、今年は漬け込む大根の選定から、その収穫時期まで、会



雲然柿漬物味究会の皆さん
お話を伺った林崎さん（前列右）
藤原さん（前列左から2番目）

員の皆さんが話し合い決定。「おいしい柿漬け」作りに積極的に取り組んでいます。
「地元の祭りにも試食に出したが、その時「懐かしい味がした」「おいしかった」と声をかけてもらった。また皆さんに食べてもらいたいという励みになった」「柿漬けをおいしく漬け、食べてもらうために、研究の課題が出てきた」「事業となれば初めてのことに不安もあるが、助言ももらいながら、会のみんなで取り組んで行きたい」と、お二人は話します。
「昔からの伝統食を伝えていくため、おいしい柿漬けを作っていきたい」と思いは一つ。がんばっている雲然柿漬物味究会の皆さんでした。

写真提供／榊阪促

「信頼 協同 元気」

雲沢地域が
元気である
地域を目指す



雲沢地域運営体
高橋惣十郎会長

雲沢地域運営体は「共同、信頼、元気」の旗印を掲げ活動を進めます。
活動方法は様々あると思いますが、一つの方法として人々の交流を通して、元気な地域を作り上げていきたいと思っています。

先人が残した自然環境、歴史的場所、建物や行事等の保存保持に努め、その成り立ちに感心を深め、次の世代に伝えていく活動にも力を入れていきたい。
そのために我が地域の次世代を担う人々と共に起業を興し、夢を描き、その実現のために、この機会を逃さず役員共々行動したい。そのことが元気のある、元気の出る雲沢地域となると信じています。皆さんこのチャンスを活かしましょう。



実り伝える風景

秋晴れの空の元、稲刈り作業も進む八割地区、豊かな田園を伝える景色がここにもあります。



雲沢地域に根ざす 「自然 人 文化」 合わさり特色

開催100回を超す品評会

伝統守る下延実業団

下延地区の青年の皆さんが参加し活動する「下延実業団」携わる地域活動の中でも、下延地区の農産物品評会は、回を数えて今年103回を迎えます。
今年から団長を務める鈴木文人さんは「下延実業団は、現在団員28人ほどで活動しています。農産物品評会などを行い、2年ごとの地元檜館神社の祭典や、運動会、盆踊りなど地域の行事にも参加しています」と説明してくれました。
農産物品評会は、毎年、市産業祭前日に開催、翌日の産業祭へも出品という形をとつていて、市の産業祭へ出品される農作物も100点を越えています。
「100回記念の品評会に携わったときは、長い歴史を実感し、大切な事業だと心に残った」と話します。



下延実業団
鈴木文人団長

「この活動が途切れることなく、地域の人たちとこれからもがんばっていききたい」と、抱負を語ってくれた鈴木さんでした。

算額奉納「熊野神社」

地域文化の貴重な記録

西長野地区の由緒ある神社「熊野神社」には、一風変わった額が納められています。横長の板の中には、漢字の他に赤や白の線で、丸や三角形の図形が描かれていてます。この不思議な額は「算額」と言い、神社には奉納された4面の算額が残されています。

和算とは西洋の影響を受けずに、日本固有の発達をした数学で、江戸時代には様々な階層の人々が、親しんだと言われます。この算学のほかに、神社には弘化3年（1846年）に奉納された前句（前句は俳諧の一種で、後の川柳の母体となったとも言われています）の額もあり、神社に納められたこれらは、先人たちの知恵や文化を今に伝える、貴重な文化遺産です。



地域の和算家・伊藤惣太郎

西長野川下田の農家に生まれた惣太郎は、長男でしたが勉学を志したと言われ、算額にも師匠として、17人の門人と共に名が記されています。

◇参考 残しておきたいむらの話／黒坂源悦